

ツタヤ図書館問題～福岡市ミニ図書館事業～

5月5日、ツタヤ図書館として生まれ変わった武雄市図書館・歴史資料館の累計入館者数が100万人を突破しました。“集客施設”として成功したツタヤ図書館は広く人気となり「わが町にもツタヤ図書館を！」と願う各地の市長や議員の手によって、全国にじわじわと広がりを見せています。

そんな中、福岡市の市長会見（2/14）で福岡市の公民館にツタヤの古本店舗で発生する廃棄本を公民館に寄付する“ミニ図書館事業”を行う事が発表されました。このミニ図書館事業は、市長事務局・市民局の事業であり、公民館を管轄する教育委員会・教育支援部・生涯学習課とは関係のない部署ですし、市立図書館との連携も全くありません。また“本を寄付”と言って無償の様に見せかけていますが、1年間の事業費130万円が市の予算として計上されています。内訳は、本棚等を購入するための印刷・消耗品費が70万円、本の配送等で必要な委託料が60万円です。これは初年度20館に導入する為の予算です。

これがどういう物か確かめる為に、昨年秋から試験的に導入されている公民館に行き実物を見て来ました。まず、量販店で買えるような安っぽい本棚3本がツッパリ棒に支えられて立っている書架。古本を住民から集めて同価値の古本を更に寄付しますという“本の寄付BOX”はプラスチックの小さな折りたたみコンテナ。ツッパリ棒を目隠しする為に『公民館のミニ図書館』と書かれた模造紙が貼ってありましたが、これは「見苦しいのでどうかして欲しい」と何度も言ったにもかかわらず放置されたので公民館側で貼ったとの事で、本棚などの備品を設える予算が1館あたり3万5千円あるとは思えない貧相さでした。本はツタヤが配架し、年に何度か入れ替えをして新鮮な棚にする、公民館側に負担はかけないという触れ込みでしたが、半年経っても入れ替えは行われず、本は値札が付いたまま送られて来ただけで公民館職員が値札を剥がし背表紙下に「ミニ図書館」と書かれたシールを貼るという手間のかかる作業を行ったそうです。この配送料が1館あたり3万円。

福岡市の公民館は146館あり、実のところ、質の差はありますがその全てに図書室や書架が設置され本が配備されています。また4年かけて生涯学習課の予算で、読書ボランティアが選んだ絵本を「スタンダード文庫」として全公民館に100冊ずつ届ける事業も行っています。市立図書館からの団体貸出しを受けている館、文庫活動を行っている館、おはなし会を行っている館と、多くの館で本を通しての活動を行っています。更に、福岡市の公民館は老朽化に伴い順次立て替え作業が行われています。私が見学した公民館も建て代わったばかりで、子ども図書室と兼用の広い子ども部屋があり、遊んだり床に寝転んで本を読んだりできるようになっていました。そんな中、ツタヤの本棚は「あれば手に取るけど、無くて構わない」という物でしたし、多くの公民館では置く場所に困るだろうとの話も聞きました。選書も、シリーズ

物が中途半端に置いてあったり文庫の実用書シリーズが置いてあったりと、背表紙の見た目が揃う事だけを基準としたんじゃないかというラインナップでした。

そもそも、安くはない税金を使いもともと図書室や書架を設置している場所に「この地域にふさわしい本を廃棄寸前本から選んで並べてあげたよ」「公民館にツタヤのミニ図書館が出来て嬉しいでしょ」と言われても困るばかりです。

公民館関係者には予算の事や事業の詳しい内容はほとんど示されず、「ああそんな事業の話、聞いた気がする」という程度の認識しか無い公民館もあるそうです。それに、どこも積極的には必要としていない事業だし、強く断った館もあるので、そのうち立ち消えるのではと見積もっている人もいます。

ここまで読んだ方の中には「そもそもこれは公民館を使った営利活動では？事業を始める前に入札などは行ったの？」と思われた方もいるでしょう。入札などは行われていません。この事業はあくまで“本を無償で寄付する”事業ですから。何より困った事に、この事業は市長が乗り気で市の幹部クラスも絶賛しており、元市職員が、公民館長や公民館主事だった場合などは深く考えずに導入し、当初の計画通り数年後には全公民館に強制導入という形になる恐れが強くなります。（現福岡市長は武雄市長と仲が良く、問題の多い事でも有名です。）

廃棄寸前本を使って、公民館で社会貢献事業を行っているという評価と実費以上の税金を手にするツタヤ（ccc）の商魂には、個人的に嫌悪を感じます。

ところで、この動きが広まれば「図書館の資料は古本でも十分」という認識が生まれ、只でさえ人件費や資料費を削られ続けている図書館に「資料は古本で買って経費をおさえろ」と言い出す役人が出てくるのではと、私は危惧しています。そしてベストセラー本なら、ひと月程度の遅れで古本として購入する事ができるのも現実です。もちろん、そんな事をすれば“図書館は無料貸本屋”とする出版界からの風当たりが更に強くなるでしょうし、モラル的にも有り得ない事だと思われる方がほとんどだと思います。けれど、武雄市図書館問題を追いかけていって今までのモラルや常識が安々と覆されて行く場面を何度も見えていますし、図書館がなぜ無料で本を貸し出す事が出来るのかがあまりにも知られていないとも感じています。（ここでの古本は新刊を扱う書店でも買える本を指しています。絶版本や貴重本は含まれません。）

実際、見学に行った公民館では、ツタヤの人が既に置いてあった一般向けの本棚を見て「これ、定価で買ってるんですか？100円で買える本もあるのに。」と言って帰ったそうです。公民館長が私に「この本、半額以下で買えるんだってね」とボソボソ言いに来たので「ツタヤのより良い本を置いているじゃないですか。それに、本は定価で買うものです」と、なるだけ明るく言いましたが、ツタヤ側の人間が本を定価で買う事が愚かな行為だと言って回っているようで、その事に憤りを感じるとともに、恐ろしい事を広めていると戦慄しました。著作物の

再販制度がなぜあるのか、考えた事も無いのでしょうか。個人が時折古本を買う事と、公立の図書館・図書室が税金で古本を買うことは、全く違う意味を持っています。

福岡市では現在、公民館でおはなし会活動や文庫、団体貸出しの活動を行っている方などが、税金の無駄遣いであり自分たちのこれまでの活動を無視する“ミニ図書館事業”を阻止しようとしています。しかし武雄市図書館問題と同様、「本が増えるのは良い事では?」「寄付なら良いじゃない」「何が悪いの?」などと、問題点が理解されず、問題意識が広がらない状況でもあります。

図書館に関心が無く利用もしない人に“図書館とは何ぞや。なぜ必要なのか”という事を、簡潔に分かり易く伝える難しさを、改めて痛感しております。

